

弔 文

千 葉 雄 次 郎

本日茲に統計数理研究所長、日本学士院会員、東大名譽教授、故末綱恕一君を統計数理研究所葬の礼をもって送るに際し、永のお袂れのごあいさつを申し述べます。君は大正11年東大理学部数学科を卒業以来、昭和34年東大を去る迄の30余年間、ほとんど東大にあって研究と教育に従事されわが国における代数学及び整数論、特に解析的整数論並びに数学基礎論の研究に大きな業績を残されました。そしてまた君は日本における統計数理の草分けとして当研究所の設立に力を尽され、研究所が当初その運営に種々の困難に際会した時代を経て、今日の研究所の基礎が築かれるにいたるまでの君の貢献は没すべからざるものがあります。君は昭和33年統計数理研究所長に推されて以来、鋭意研究部門の整備拡充と大型電子計算機の開発、導入を行ない研究者の育成と研究体制の強化に力をいたされ、また研究所創立以来の念願であった庁舎の建築と君の信望と関係者の深い理解と協力を得て43年新営に着手、昨年秋には君自ら所長としてその完成を祝うことができました。かく君は研究所の創設にあずかって以来25年間、終始その発展と充実に心を砕き、病に仆れてからも今後ますます重要性を増す情報時代の情報処理の問題など統計数理の研究、応用と研究所のあり方とその将来は片時もその念頭を去らなかつたのであります。君はかく当研究所の設立発展に貢献されたほか、また科学基礎論学会をも創設され、その門下には幾多の数学界の俊秀が輩出しております。そして1960年スタンフォードにおける科学基礎論国際学会には、日本代表として出席されたほか国際数学会議には議長に選ばれ、また国際統計協会総会が日本で開催された時には運営本部員として活動されるなど、国際的にも広く活動されました。君は学界においてはその道の権威者として深い尊敬を得られ、科学基礎論学会理事長のほか、日本印度学仏教会、日本統計学会、日本数学会等の役職を歴任されたほか、また広く各界からも信望を寄せられ学術研究会議、教育検定委員会、統計委員会、大学設置委員会、教育課程審議会等数多くの委員としての公務にも就かれています。ここに特に申し述べたいことは君の仏教の研究は遠く一高在学時代に遡るもので、特に華嚴経の造詣は深く君の人格にも強く影響していることとされ、君の数学の基礎にはこうした君の仏教思想とそしてこれ又深く研究された西田哲学とを取り入れた独自の理論が築かれているものであります。このような君の高い教養と深い学殖からにじみ出る君の人柄は君に接する人々を常に温かく包容する慨きがありましたが、その反面研究に対してはきわめてきびしい態度をもって臨まれたことが思い出されます。今や君を再びこの研究所で見ることはできなくなりましたが、所員はそれぞれ今後一層の研鑽を積み、また職員一同もまた所員と共に心を一にして研究所の目的達成のために努力を重ね、君の素志に副い得ることを堅く信ずるものであります。つつしんで御冥福を祈ります。

弔 辞

坂 田 道 太

本日ここに統計数理研究所長、日本学士院会員、東京大学名譽教授、正三位勲二等末綱恕一博士の統計数理研究所葬が営まれるにあたり謹んで哀悼の意を表します。

博士は大正11年東京帝国大学理学部を卒業後37年の長きにわたり九州大学、東京大学において教鞭をとられ多くのすぐれた後進を育成される一方、研究者としては代数的整数論の研究に解析的方法を導入して世界的な業績を挙げ、さらに数学の基礎づけに仏教思想、西田哲学と取り入れたユニークな理論をきずかれるなど今日に至るまでつねに新しい学問研究の推進に努

めてこられたのであります。博士はこれらの卓越した業績によって昭和22年に日本学士院会員に列せられるとともに科学基礎論学会理事長、日本印度学仏教学会監事、日本統計学会名誉会員、日本数学会理事長など関係学会の要職に推されましたが一方、文教行政の上でも大学設置委員会、教育課程審議会等各委員を歴任されるなど多大の貢献をなされました。昭和19年文部省統計数理研究所の創設にあたって博士は日本における統計数理の草分けとしてその設立準備委員となられ、設立後は引き続き研究所評議員として研究所の基礎づくりに努力されたのであります。その後昭和34年には衆望をになってその所長に就任されました。以来博士は所長として当研究所における研究の発展と研究者の育成に努められ、よくその重責を果たされたのであります。この間多年の懸案であった研究所の新庁舎建設の事業を指導完成され、またいわゆる情報化社会へ向かっての情報処理技術の画期的進展に対応し、大型電子計算機の導入をはかるなど研究環境の整備充実について尽力してされました。

最近にいたり博士の健康がすぐれずご療養につとめておられると聞きその全快の一日も早からんことを祈っておりましたのに、にわかには他界されましたことはわが国の学界にとってはもちろんのこと国家のためにも大きな損失といわざるをえません。しかも新しい環境において一段と充実した研究所の運営が軌道に乗ろうとしている矢先にこの訃報に接しましたことは、所長のすぐれた識見と指導力に期待するところ大なるものがありましただけに痛惜に堪えない次第であります。

ここに深く博士の逝去をいたみ生前の功績に対して限りない尊敬と感謝の意をささげ謹んで弔辞を呈します。

昭和45年8月25日

弔 詞

柴 田 雄 次

謹んで日本学士院会員・統計数理研究所長・東京大学名誉教授・理学博士末綱恕一君の霊前に申し上げます。君は大正11年東京帝国大学理学部数学科を卒業し直ちに九州帝国大学に奉職し同学講師、さらに助教授を歴任し、同13年東京帝国大学助教授に任ぜられて以来昭和34年同学教授を退官せられるまで実に30有余年の永きにわたり、同学の講壇に立ち教育に研究に後進の指導育成に精励せられました。この間昭和22年には創設まだ日の浅い統計数理研究所長に就任、また昭和34年には再度同研究所長に任ぜられてその運営管理に意を用いられ、同研究所、今日の盛況の礎を築かれるとともにつとに数学界の泰斗として幾多の輝かしい業績を挙げられましたことは、学界の齊しく鑽仰するところでもあります。君の数学上の業績は確率及び統計、代数学、整数論、微積分学、解析学等各方面にわたり一々枚挙に遑ありませんが、いずれも君の解析学、代数学及び整数論についての深い知識に裏付けされた珠玉の研究でありその後の研究に大いなる指針を与えたものであります。君の数学基礎論は君の比類なき不屈の研究精神を示すものであります。君は「自然数全体と直線連続体とを全数学を担う二つの支柱と看做し、これから行為的直観的に把握し得るものを勝義の数学的存在と考え」それが「ただ有限箇のものばかりでなく或る種の無限者をも包含する」ものと考え、その基礎になるものは直観的内容をもつものとして基礎づけられることを明らかにすることにその目的をおいたのであります。この数学基礎論は哲学、さらに仏教学ことに華嚴思想にまでさかのぼって君をして考究せしめるに至ったことは周知のことであり、これは君の生涯をかける研究になりました。君は昭和22年勅旨をもって帝国学士院会員を仰せ付けられて以来運営委員会委員、紀要編集出版委員会委員、明治前日本科学史編纂委員会委員として本院のために尽瘁せられましたことは、本院の深く感謝するところでもあります。

本院は君を会員として有することを誇りとし向後君に期するところ多大なるものがありましたのに去る6日俄かに君の訃に接し誠に痛惜の極みに堪えません。ここに君の学勲を偲び会員一同を代表し恭しく弔詞を捧げます。

昭和45年8月25日

弔 辞

奥 田 豊 三

統計数理研究所長末綱恕一先生が逝去され、本日ここに統計数理研究所葬が執り行なわれますことは、まことに哀悼に堪えないところであります。

先生が統計数理学の権威として、その偉大な業績は、ひとりわが国のみならず世界の学会のひとつしく敬重おくあたわざるところであります。昭和34年東京大学教授から衆望をになって統計数理研究所長に就任され、今日までわが国数学の実用応用面に最も関係の深い統計数理学の研究開発に輝かしい一新紀元を画されました。

昨年11月15日に、ここの新庁舎落成式にお招きを受けました際に先生のお喜びと力強い将来への御抱負を拝聴致しましたことが昨日のこのようにしのばれ今更ながら感銘深いものがございます。文部省所轄研究所長会議の長老として、いつも物静かに研究所の在りかたや今後の発展につきまして、私共後輩を導きくださいましたことは、忘れることのできないところであります。

永年所長として研究所の内容、外観ともども立派に整えられ、今後は先生の崇高な、円満な御人格とすぐれた御指導のもとに、益々円熟された御活動をと祈念致しておりました矢先きに、にわか御訃報に接し衷心から哀惜に堪えませぬ。

ここに先生の生前の輝かしい御業績をたたえ、私どもに賜わった御指導に感謝しつつ文部省所轄研究所を代表し謹んで弔辞を捧げます。

昭和45年8月25日

弔 辞

正 田 建 次 郎

末綱先生には8月6日その輝かしい生涯を閉じられました。私共数学界に身を置く者にとりましては、その支柱を失なった思いで悲しみに堪えませぬ。ここに先生のありしお姿をしのび、お別れの言葉としたいと思ひます。

先生が東大に助教として迎えられたのは大正13年で当時先生は既に解析的整数論の分野に於て一家をなしておられ、その年L関数についての特別講義をなさいました。当時3年生だった私も先生の講義を判らないながら拝聴しました。私は先生の東大に於けるその意味での第一回の門下生であることを誇りとしているものであります。先生は昭和2年ドイツに行かれ、ゲッチンゲンに於てランダウのところで研究に従事されました。アルチン、ハッセ等と親交を結ばれたのも当時のことであります。私もゲッチンゲンで先生にお目に掛り一緒にヒルベルトの数学基礎論やネターの表現論などの講義を聞いたことも今となっては懐しい思い出であります。三年間の在外研究をおえて帰国をされた先生は、我国に於ける研究のあり方についてお考えになり、代数整数論を主とする談話会を毎週金曜日に開くことにし、それを主催されました。その会には高木先生もご出席になり私共若い者にとって大きな刺激になり励みになったことは、この会に出席された方々が皆一様に感じておられることと思ひます。先生には昭和7年より高木先生の後を受けて代数の講座を担当されることになり、その講義の内容をうかがうことができたのは、翌年から大阪大学で代数の講義をすることになっていた私にとって真に幸なことであります。先生はその後昭和34年の停年まで数学の研究と教育に専念され、その秀れた学問的業績により昭和22年には日本学士院会員に選定され、またその門下からは幾多の俊英が輩出しておられます。先生はまた統計数理研究所の設立に関与され、後には所長として御逝去までその運営に当られました。その間研究所の内容の充実とともに建物の改築を实

現されました先生のご仕事は研究所の歴史に長く輝くことと思います。先生にはまた日本数学会のために、常に多大の配慮を賜りました。委員長または監事としての他、高木先生記念号の編集長として、また昭和31年の東京、日光に於けるシンポジュームの会長を引き受けられる等、数学会のために御尽力下さいましたことは、学会員一同の深く感謝しているところであります。

先生は高等学校御在学中より仏教に深い関心をもっておられたそうではありますが、後年数学の基礎に関する先生独自の研究から、西田哲学更に仏教の研究に当られ、その道に於いても秀れた業績を残されました。数学、哲学、宗教が先生に於いて一つに統合されしかもその各の分野に於いてそれぞれ立派な仕事をしておられるということは、真に稀有なことであり、時流に流されず独自の道を究めようとする先生のお姿に頭のさがる思いがするのは私一人ではないと思います。このような頼り甲斐のある先輩を失いましたことは、数学界の一大損失であります。私個人としてもとみに淋しさを感じる次第であります。

終りになりましたが御遺族の皆様方が、此度の御不幸に堪えてそれぞれの道を立派に生き抜かれることを願ってお悔みの言葉に代えたいと思います。 昭和45年8月25日

弔 辞

下 村 寅 太 郎

今日末綱さんの霊前に弔辞を捧げることになるとは我々一同夢にも想はなかった衝撃であります。哀悼痛恨の極、言ふべき言葉を知りませぬ。我々の科学基礎論学会は末綱さんを中心として発足し発展し内外に存在を知られる学会となったのは専ら末綱さんの誠実な努力と情熱によるものであります。この学会が純粋な学会の矜持を保持し終始一貫して自由闊達な気宇と藹々たる友情によって結ばれていたことも専ら末綱さんの高潔な人格に負ふものであります。我々一同の平生深く尊敬し感謝していた所であります。唯今改めて学会創立以来のことを回想すると万感せまるものを覚えます。終戦直後敗残の焼土に立って幸運にして生き残った学徒の義務として即刻我が国学問の再建に懸命すべきを思い、その要石として哲学者と科学者と相協力して科学哲学を推進すべきことを決意しました。末綱さんを中心にして「基礎科学」が発刊されたのは昭和22年であります。私は今停電中のくらいローソクの灯火で相会合し相計画した時の情景を想越し感慨に堪えませぬ。爾後28年4月まで戦後の困難を冒し刊行を続けて参り、改めて正式の学会として継続再出発することになり、「科学基礎論学会」と名のり、欧文誌をも併せ刊行、海外の学会とも連絡をもつことになりました。末綱さんは高木貞二先生を継いで委員長として終始一貫今日にいたるまでこの学会の指導者として尽瘁されました前後23年の長きに亘りました。学会の今日ある所以のものは主として末綱さんによるものとして我々会員一同の哀心よりの感謝と哀悼の意をいたすものであります。末綱さんはいうまでもなく世界的名声をもつ数学者でありますと同時に稀にみる深い哲学的洞察力をもった思想家であります。特に深く西田哲学に傾倒されこの難解な哲学思想の真髓を把握して自己の数学基礎論に活用する域に達し、我が国哲学会に於ても深く尊敬されてきました。更に晩年には鈴木大拙先生に私淑しその影響の下に華嚴経の研究に沈潜されその無分別の分別の思想を数学論にまで導入する企てをすらすら敢行されました。あくまで数学者科学者の精神を堅持しながらそれに留ることなく形而上学に到る路を求め、真に哲学的叡知をもつ数学者として終始されました。誠に比類のない独自の思想家でありました。今、卒然として逝かれたことはただに我々のみ痛惜に止りませぬ。末綱さんは人として寛宏の長者であり時流に超然たる清純な学究でありその高風は我々すべての景慕して止まなかつたものであります。今日は科学基礎学会の一員として弔辞を捧げるのでありますが、私には30年にわたる最も敬愛した先輩友人としてその悲しみの特に切な

るものがあります。これはもはや言葉にすることは出来ませぬ。虔で御冥福を祈るのみであります。

昭和45年8月25日

弔 詞

宮 本 正 尊

末綱怨一先生、先生は数学理論を基礎づけるために早くから華嚴哲学の数理の研究に専心せられました。そして西田先生の矛盾的自己同一、大拙先生の即非の論理、宇井先生その他の縁起論研究などを参考しながら研究を進められました。昭和26年10月15日、東大山上会議所における「日本印度学仏教学会」の創立総会に参加し、「監事」の要職につかれ、爾来19年の長い間学会のために尽し、陰に陽に理事長の私を扶けて下さったのであります。爾来学会は今日の隆盛をきたし世界における斯学最大の学会にまで育ちましたことについて、先生のお蔭を感謝申し上げております。先生は自然科学の原理研究と仏教とを結びつけ、数学の基礎理論に新しい解明をなされると共に、仏教の停滞と自己疎外を指摘して、その進歩と現代化への方法と実践を身をもって究明する努力をして下さいました。先生のように新しい学理の探求に身を挺したお方は、われわれの学会においてはもとより、日本の学会世界の学会においても見出し得ないのでありましょう。先生が発表せられた「無分別智について」(科学基礎論研究第6巻第4号)(印度学仏教学研究第13巻第1号)(昭和40年1月)「分別智と無分別智」(印度学仏教学研究第16巻第1号,昭和42年12月)「大悲と無分別智」(印度学仏教学研究第18巻第1号,昭和44年12月)の御論文は精密な研究であると共に、数理と仏教を現代に生かす新しい道を示唆せられたものとして、永遠に光りを放つ尊いご論文であります。私は昨年6月大正大学における学術大会においても、本年7月花園大学における学術大会においても、先生の尊い御示唆を会員諸君に強調してきたのであります。明年学会創立20周年を迎える目前において、先生溘焉として逝かれ、今さら先生の尊さ偉大さを身に泌みて感じているのであります。私共は今後長く先生の尊い御教示を世に生かすよう努力いたし先生の御恩にお酬い申し上げたく先生の御霊前にお誓いする次第であります。

昭和45年8月25日